

「いじめ問題」についての教師の意識と指導に関する研究

A Study about the Consciousness and the Guidance of Teachers Dealing with the Issue of Bullying

村 井 万寿夫
Masuo Murai

〈要旨〉

「いじめ問題」における学校の実態や教師の意識を把握したり、「いじめ問題」に対処するための指導内容や手立てについて探ったりすることを目的に、文献調査を経た上で石川県内小学校教師を対象に3回にわたるアンケート調査を実施した。その結果、多くの教師は自己の学校においていじめはあると考えており、それに対処するための手立てをとっていることや、熟練教師の指導内容や手立てについての興味・関心が高いことなどが明らかとなった。また、中堅教師と熟練教師の指導内容や手立てについてはほぼ同じ傾向が見られるが、熟練教師は自分のクラスの指導だけにとどまらず、学校全体の生徒指導を意識したり児童理解に努めたりすることが多いとの示唆を得ることができた。

〈キーワード〉

いじめ問題, 実態把握, 対応マニュアル, 熟練教師, 児童理解

1 はじめに

教育学の研究領域の一つである「教師教育」を研究視座にした場合、ICT活用(宮崎・高橋・堀田, 2007)や情報教育(松田, 2007)を対象にした研究が多く見受けられる。また、教師の授業力量(木原, 2006)を扱った研究も見受けられる。

「教師教育」を研究視座にした教育学研究はこのような状況にあり、学級経営や生徒指導を対象にした教育学研究は未開の分野であると言える。

教育学は、「授業システムの最適化」をめざすものであると言えるが、本研究においては教科の授業という枠を超え、全人格的な教育の視点から教師教育について言及する。すなわち、教科の授業が成立するための前提としての学級経営や児童理解、生徒指導の面から、現在、「学力」と並んで大きな教育問題として取り上げられることが多い「いじめ問題」に焦点を当てる。

「いじめ問題」は、どの教師も避けては通れない喫緊の課題ではあるが、その取り組み方や指導方法は教師によって様々であり、教育学の立場から言及することは大きな意義があると考えられる。

「いじめ問題」に対処するために教師は学級経営、児童理解、人間関係づくりなど、さまざまな面からアプローチしていくことが重要であるとの考えのもと、「いじめ問題」をとりまく教師たちの実態について探ってみる。

教育学は研究によって得られた知見の一般化の考え方が

根底にある。「いじめ問題」に対処するための手立てを一般化していくことは、広く学校現場の教育活動に資することができると思われる。

2 研究の目的

教師は「いじめ問題」に対処するため、どのような指導内容や手立てをとったり重視したりしているかを明らかにする。

3 研究の方法と内容

3-1 文献調査

「いじめ問題」に関する図書や事例集などの文献をもとに、扱っている内容について把握し、学校現場の教師を対象にしたアンケート調査内容の参考とする。

関連図書としては、「いじめ問題」に関する市販図書から選定する。また、事例集としては、石川県教育委員会が平成18年12月に発行している「いじめを許さない学校づくりを ストップ!いじめ ~いじめ対応マニュアル作成事例集~」(以下いじめ対応事例集と略記)をもとにする。

3-2 アンケート調査

「いじめ問題」をとりまく学校現場や教師たちの実態を把握するために、3回にわたるアンケート調査を実施する。

3-2-1 第一次調査

石川県内の小学校教師に対し、「いじめはあるか」「対応マニュアルはあるか」「石川県教委発行のいじめ対応事例集を知っているか」「いじめ問題に対処するための手立ては何か」などの観点から、アンケート調査を実施する。依頼方法は電子メー

ル、または郵送で行う。

3-2-2 第二次調査

第一次調査結果を集約し、定量的な分析を行う。それをもとに、さらに教師の実態に迫るための質問内容について検討し、第一次調査の回答者に対して 2 回目のアンケート調査を実施する。

3-2-3 第三次調査

第二次調査対象者が所属する学校内の熟練教師に対して、第

二次調査と同じ内容のアンケート調査を実施する。そして、第二次調査対象者と第三次調査対象者の回答結果を比較する。

4 研究の結果

4-1 文献調査

4-1-1 関連図書の内容分析結果

6 冊の図書の内容を俯瞰できるようにした (表 1)。

表 1 6 冊の図書の内容 (一部)

書名	1 いじめの基本問題	2 防止の実践プログラム	3 いじめの実態把握	4 .防止の学習と活動	5 いじめ防止の学級づくり
いじめ防止プログラム	<ul style="list-style-type: none"> いじめ理解の基本と学校が抱える困難 2万人アンケート 海外に学ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 防止実践の見取り図 人権、愛、ロマンの旗あげ 3つの原則 4つの要素 学校での対応 学級での対応 個人への対応 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート調査法 観察法 口頭法 	<ul style="list-style-type: none"> 防止プログラムの要件と方法 プログラム実践例 発見後の活動プログラム 子どもと親の力量形成 	<ul style="list-style-type: none"> 発生時期と構造 いじめのない学級視点 子どものための班作り 「楽しい給食」作り いじめ事件指導 加害者指導の実際 被害者救済の視点 事件後の学級指導
いじめ	1 いま、いじめは	2 いじめでいじめないで	3 誰にも訴えない	4 克服の視点と方法	5 いじめ克服Q&A
	<ul style="list-style-type: none"> 大河内君自殺が突きつけるもの 現代のいじめとは何か 	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめ」でいじめないで、大人たち 	<ul style="list-style-type: none"> 命を犠牲にしてもなぜ訴えない 大人にシカトされ、信用できない 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもを主役に 誰でもできる発見法 学校の課題と展望 撃退の家庭作成 	<ul style="list-style-type: none"> わびに来たが 登校をしぶる子 日頃の取組 いじめられる子の問題
文化としてのいじめ問題	1 文化的アプローチ	2 人間はどんな動物か	3 学校システムの疲労	4 いじめを生む土壌	5 「考える」ということ
	<ul style="list-style-type: none"> 「今」の連続の上に自殺はない 伝統的生活風景と切り離されて 	<ul style="list-style-type: none"> ある小論から 戦前と戦後 マスコミ報道の事実と真実 	<ul style="list-style-type: none"> 学校はなくせない 人質にとられている 母親は被害者か どうすればの前に 	<ul style="list-style-type: none"> 教師の目になぜ映らないか いじめの土壌 	<ul style="list-style-type: none"> 強制し合わない 情報処理の連続 性のめざめと自立といじめ
いじめ問題	1 はじめに	2 なぜ今いじめ問題か	3 いじめの起こる背景	4 派生する問題	5 どう解決するか
	<ul style="list-style-type: none"> 教育的、行政的取組 以前にない特徴 構造的な問題 人間関係の希薄 	<ul style="list-style-type: none"> 象徴する三事例 資料が示す深刻さ 正しい対応 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども自身の要因 学校の要因 家庭の要因 社会の要因 問題行動発生契機 	<ul style="list-style-type: none"> 登校拒否 家庭内暴力 自殺 非行 精神障害 	<ul style="list-style-type: none"> 起きてしまった場合 一般的危機サイン 早期発見のコツ 起きたときの対応 こじれたときの対応
全書・いじめ	1 「いじめ」理解	2 いじめへの対応	3 連携による対応	4 いじめの予防	5 早期発見カンどころ
	<ul style="list-style-type: none"> いじめとは何か どうするか 現状、内容 原因と対策 	<ul style="list-style-type: none"> ストラテジー 子どもへの対応 保護者への対応 ロールプレイ対応 生き方の援助 	<ul style="list-style-type: none"> 情報連携から行動連携へ チーム支援と技法 家庭との連携 外部機関との連携 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ防止教育 いじめ予防研修会 防止プログラム SGE 対応できる子育て 	<ul style="list-style-type: none"> 調査、観察から 子どもの様子から 保護者の訴えから 周囲の子どもから 同僚教師情報から
いじめ問題の発生・展開	1 イギリスのいじめ問題	2 いじめの社会問題化	3 いじめ問題のしくみ	4 いじめの背景と周辺	5 いじめ問題の責任
	<ul style="list-style-type: none"> いじめ加害者 その家族 世界のいじめ問題 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ問題の発生 政治・政策課題として いじめ認識の転換 いじめと恐喝犯罪化 	<ul style="list-style-type: none"> いじめのとらえ方 学校教育組織の隠蔽体質 とらえ方の諸タイプ 	<ul style="list-style-type: none"> 青少年の攻撃性 消費社会と学校 「過剰消費社会」と攻撃性 	<ul style="list-style-type: none"> いじめ問題の責任 いじめ問題への介入 子どもの「自立」のために

(注 1) 表中の「1～5」は章の見出しを示し (6 章以降は省略)、「・」は節の見出しを示す。

(注 2) 図書名は略記してある。正式名は巻末の参考文献を参照。

この6冊の図書からわかることは、次のようなことである。
いじめ問題が「起きた後」のことまで扱っている図書が多いが、「起きた後」のことよりも下記に示すことに多くのページを割いている。

- ・なぜ、いじめが起きるか（しくみ、要因、背景）
- ・どのように発見するか（実態把握）
- ・防ぐにはどうするか（克服、防止、予防）

以上のことから、学校現場の教師に対して、いじめを防ぐことにつながる指導の手立てや内容について調査してみる必要があると考える。

4-1-2 いじめ対応事例集の分析結果

いじめ対応事例集には、「指導体制の在り方」として、次の4観点から26項目のチェックポイントが示されている。

◇指導体制

- ・いじめの問題について、特定の教員が抱え込んだり、事実を隠したりすることなく、学校全体で対応する体制が確立しているか。(ほか2項目)

◇教育指導

- ・道徳や学級活動の時間にいじめにかかわる問題を取り上げ、指導が行われているか。(ほか8項目)

◇早期発見・早期対応

- ・日常の教育活動を通じ、教師と児童生徒、児童生徒間の好ましい人間関係の醸成に努めているか。(ほか9項目)

◇家庭・地域社会との連携

- ・家庭や地域に対して、いじめの問題の重要性の認識を広めるとともに、家庭訪問や学校通信などを通じて、家庭との緊密な連携協力を図っているか。(ほか3項目)

以上のことから、「教師自身のこと」「教師間のこと」「学校のこと」「学校と家庭・地域のこと」といった観点からアンケート内容を検討する必要があると考える。

4-2 第一次調査

4-2-1 アンケート内容について

6冊の図書といじめ対応事例集の分析結果をもとに、12項目によるアンケート文書を作成した(表2)。

表2 第一次調査内容

<p>① あなたの学校では、いじめがあると思いますか。 <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない <input type="checkbox"/> あるかないか分からない</p> <p>② あなたの学校には、いじめ対応マニュアルがありますか。 <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない <input type="checkbox"/> あるかないか分からない</p> <p>③ あなたは、石川県教育委員会が平成18年12月に発行した「いじめ対応マニュアル作成事例集」(以下「いじめ対応事例集」と称す)を知っていますか。 <input type="checkbox"/> 知っている <input type="checkbox"/> 知らない</p> <p>④ あなたの学校では、いじめ対応事例集の内容を職員全体で共通理解する場をとりましたか。 <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p> <p>⑤ あなたの学校では、いじめ対応事例集をもとに、学校独自のマニュアル作成を行ったり、既に作成してある学校独自のマニュアル内容を見直したりしましたか。 <input type="checkbox"/> している <input type="checkbox"/> していない <input type="checkbox"/> したか、していないか分からない</p> <p>⑥ あなたの学校では、いじめ問題について保護者との懇談会を行いましたか。 <input type="checkbox"/> 学級懇談会を行った <input type="checkbox"/> 学年懇談会を行った <input type="checkbox"/> 学校全体で懇談会を行った <input type="checkbox"/> 保護者との懇談会を行っていない</p> <p>⑦ あなたの学校では、いじめ問題について地域住民との懇談会を行いましたか。 <input type="checkbox"/> 学校長、教頭、生徒指導主事等が公民館や町内会などの会合に参加して懇談した <input type="checkbox"/> 学校長、教頭、生徒指導主事等が学校評議委員と共に懇談した <input type="checkbox"/> 地域住民との懇談会を行っていない <input type="checkbox"/> 地域住民との懇談会を行ったかどうか分からない</p> <p>⑧ あなたはこれまでに、学級またはあなたが担当している授業時間を利用して、いじめについての指導を行ったことがありますか。 <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> ない <input type="checkbox"/> 今後行う予定である</p> <p>⑨ 「日頃の学級経営や児童理解によって、いじめのない学級・学校を作っていくことが大事である」と言えますが、このことについてどう思われますか。 <input type="checkbox"/> とてもそう思う <input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> そう思わない <input type="checkbox"/> まったくそう思わない</p> <p>⑩ いじめ問題が全国的話題になってから、あなたの学級経営(または授業経営)や児童理解の仕方に変化はありましたか。 <input type="checkbox"/> あった <input type="checkbox"/> なかった</p> <p>⑪ いじめが起こらない学級づくりのため、あなたは日頃からどのような学級経営や児童理解に努めていますか。(複数回答可) <input type="checkbox"/> 子どもの訴えなどをよく聴く <input type="checkbox"/>トラブルが起きたら当事者間や学級で話し合う <input type="checkbox"/> 子ども達の人間関係を把握する <input type="checkbox"/> 休み時間に一人で過ごしている子にわけを聞く</p> <p>⑫ あなたは、熟練教師(学級経営や児童理解が得意な教師)の教授スタイルについて興味や関心がありますか。 <input type="checkbox"/> とてもある <input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> どちらかといえばある <input type="checkbox"/> どちらかといえばない <input type="checkbox"/> ない</p>
--

4-2-2 回答者について

平成19年3月15～25日の期間に石川県内の55小学校の教師に依頼し、51校102名から回答を得た。

4-2-3 「いじめがあるか」についての結果と考察

ア 「ある」と回答した教師の割合

「あなたの学校ではいじめがあると思うか」の問いに「ある」と答えた教師の割合は74.5%を示した。4人に3人の教師はいじめがあると考えていることがわかる。

イ 低学年担任の教師の割合

石川県教委が2006年12月22日に公表した公立全小中高等学校の「いじめアンケート」の集計結果によると、「いじめられている」と申告した低学年(1～3年)の子どもは、23.6%と突出しており、「袖を引っ張られる程度でもいじめと回答するなど、まだ、いじめといたずらの区別がつきにくい時期であることも考慮に入れる必要がある」との見方を示している。

そこで、本調査で「ある」と回答した低学年を担当する教師の割合を算出した結果、24.5%が得られた。

これにより、県教委調査による子どもの割合と本調査による教師の割合は、ほぼ同じであるといえる(表3)。

表3 子どもと教師の意識の比較

子どもの意識(県教委による調査)	23.6%
教師の意識(本研究による調査)	24.5%

このことから、県教委が考える以上にいじめの実態があるのではないかと考えることができる。

4-2-4 学校独自の対応マニュアルについての結果と考察

「学校にはいじめ対応マニュアルがあるか」の問いに「ある」と答えた学校の割合は84.3%を示した。

10校に8校以上の学校で対応マニュアルがあることがわかる。

4-2-5 石川県教委の対応マニュアルについての結果と考察

「石川県教育委員会が平成18年12月に発行したいじめ対応事例集を知っているか」の問いに「知っている」と答えた教師の割合は90.2%を示した。

10人に9人の教師は認知していることがわかる。

4-2-6 職員全体の共通理解についての結果と考察

「いじめ対応事例集の内容を職員全体で共通理解する場をとったか」の問いに「はい」と答えた教師の割合は69.6%を示した。

これをもとにすると、多くの小学校において石川県教育委員会によるいじめ対応事例集の内容を共通理解しているといえることができる。

4-2-7 学校独自のマニュアルについての結果と考察

「いじめ対応事例集をもとに、学校独自のマニュアル作成を行ったり、既に作成してある学校独自のマニュアル内容を見直したりしたか」の問いに対して、「している」と答えた教師の割合は74.5%を示した。

前問との相関をみると、いじめ対応事例集について共通理解したと答えた教師は、学校独自のマニュアルを見直したりしていると答えている割合が高いという結果が得られた。

4-2-8 保護者との懇談会についての結果と考察

「いじめ問題について保護者との懇談会を行ったか」の問いに「はい」(学級・学年・学校全体のいずれかの懇談会開催)と答えた教師の割合は30.4%と低い値を示した。

約7割の教師においては、保護者との懇談会を行っていないことがわかる。

4-2-9 地域住民との懇談会についての結果と考察

「いじめ問題について地域住民との懇談会を行ったか」の問いに「はい」と答えた教師の割合は14.7%と極めて低い値を示した。また、61.8%の教師においては地域住民との懇談会を行っていない(「行ったかどうか分からない」を除く)ことが示された。

4-2-10 いじめ問題の指導についての結果と考察

「学級または担当する授業の時間を利用していじめについての指導を行ったことがあるか」の問いに「ある」と答えた教師の割合は94.1%を示した。

ほとんどの教師が指導していることがわかる。

4-2-11 日頃の学級経営や児童理解についての結果と考察

「日頃の学級経営や児童理解によっていじめのない学級・学校を作っていくことが大事である」に対し、「とてもそう思う」と答えた教師の割合は76.5%、「そう思う」は23.5%を示した。

回答した教師全員が日頃の学級経営や児童理解を重要視していることがわかる。

4-2-12 指導の仕方の変化についての結果と考察

ア 変化が「あった」教師

「いじめ問題が全国的话题になってから、自己の学級経営や児童理解の仕方に変化はあったか」の問いに「あった」と答えた教師の割合は47.1%を示した。

ほぼ2人に1人の教師が指導の仕方に変化があったことがわかる。

イ いじめの実態と指導との関係

いじめがあるかの問いに「ある」と答えた教師の中で、指導の仕方に変化が「あった」と答えた教師の割合を算出した結果、46.1%が得られた。

次に、いじめがあるかの問いに「ない」と答えた教師の中で、指導の仕方に変化が「あった」教師の割合を算出した。その結果、58.8%が得られた(表4)。

表4 子どもと教師の意識の比較

いじめはあり、変化があった教師	46.1%
いじめはなく、変化があった教師	58.8%

このことから、自己の学校でいじめが「ない」と答えた教師ほど、学級経営や児童理解の仕方に変化があったといえることができる。

4-2-13 学級経営や児童理解についての結果と考察

「いじめが起こらない学級づくりのため、日頃からどのような学級経営や児童理解に努めているか(複数回答可)」についての回答は、「トラブルが起きたら当事者間や学級で話し合う」が一番多く90.2%を示した。次いで「子ども達の人間関係を把握する」が87.3%、そして、「子どもの訴えなどをよく聴く」が85.3%であった。このことから、多くの教師は学級経営面や児童理解面において努力していることがわかる。

表5 第二次・第三次調査内容

① 学級経営の考え方について
() 4月の学級開きの際には明確な学級経営案を持って臨んでいる。
() 学級づくりのポイントは4月(あるいは4~5月まで)であると考えている。
() 学級や学校のルールや規範について、子ども自らが気づきながらクラスのきまりを作っていくことを大切にしている。
() 学級や学校のルールや規範を教師が示し、それから外れたときには教師が注意したり指導したりすることを大切にしている。
② 子ども同士の関わりについて
() 生活面での子ども同士のつながりを教師が把握し、関係づくりを支援している
() 学習活動で子ども同士の関わりを持たせ、集団としての満足感を持たせている。
() お互いのよさを認め合うことを授業時間や学校生活の場で意図的に作り出している。
() お互いに気づいたことを出し合える学級づくりをしている。
③ 問題点の発見・解決について
() 見つけたトラブルや問題点を子どもたちに返し、気づかせるようにしている。
() トラブルや問題点は、学級全体(一斉)で話し合うことが多い。
() 問題や悩みを子どもから相談しやすい環境や方策を持っている。
() ときには強く説教したりすることも取り入れている。
④ 子どもと保護者との関わりについて
() 問題を抱えた子どもを学校だけで厳しく指導するのはだめだと考えている。
() 問題を抱えた子どもへは家庭訪問等を行い、保護者との連絡を密にしている。

4-2-14 熟練教師の教授スタイルについての結果と考察

「熟練教師(ここでは学級経営や児童理解が得意な教師をさす)の教授スタイルについて興味や関心があるか」の問いに「とてもある」と答えた教師の割合は43.1%、そして、「ある」は35.3%を示した。両者を合計すると78.4%になり、多くの教師が熟練教師の教授スタイルに興味や関心を抱いていることがわかる(図1)。

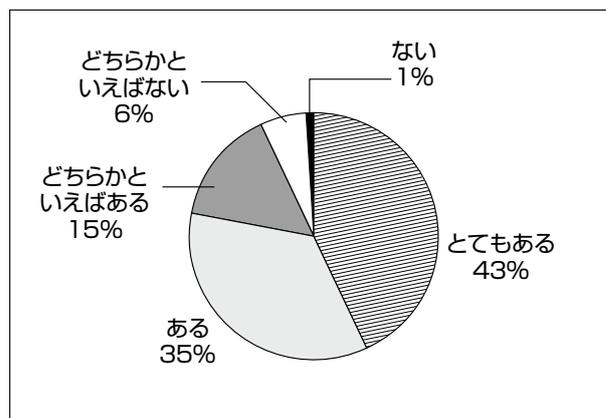


図1 教授スタイルの関心度

4-3 第二次調査と第三次調査

4-3-1 調査の対象と結果の数値化

第二次調査は、第一次調査において熟練教師の教授スタイルに興味や関心が「とてもある」「ある」と答えた教師15名(中堅教師)を対象とした。第三次調査は、第二次調査において「職場に熟練教師がいるか」について「いる」と回答した教師を通じて、熟練教師に依頼した(表5)。

- () 集団に適応できない子どもに対し、保護者や相談機関等と連携をとって対応している。
- () 保護者に保護能力がないときは学校が対応すべきだと考えている。
- ⑤ 教師集団について
 - () 子どもの行動に問題点を見つけたり指導上の悩みを抱いたりしたときには、できるだけ自分ひとりで解決しようとしている。
 - () 子どもの行動に問題点を見つけたり指導上の悩みを抱いたりしたときには、できるだけ同僚や先輩の教師に相談している。
 - () 管理職や生徒指導主任と相談しながら指導を行うようにしている。
 - () 言動が気になる子どもの行動は、他のクラスや学年であっても学級担任に連絡したり、その場で指導したりしている。

4-3-2 回答結果

アンケート内容の5観点4項目による設問(全20問)に対して1から4の順位によって回答した結果を4から1に数値化し、各設問の平均値を算出した。

ア 学級経営の考え方について

中堅教師においては「学級経営のポイントは4月であると考えている」教師の平均値が3.3と最も高い値を示している。熟練教師においても同様であり、平均値3.3が得られた(表6)。

表6 学級経営の比較

学級経営の考え方	中堅教師	熟練教師
4月が重要である	3.3	3.3

イ 子ども同士の関わりについて

中堅教師においては「お互いのよさを認め合うことを授業時間や学校生活の場で意図的につくり出している」教師の平均値が3.4と最も高い値を示している。熟練教師においても同様で、平均値3.2が得られた(表7)。

表7 関わり比較

子ども同士の関わり	中堅教師	熟練教師
よさを認め合う	3.4	3.2

ウ 問題点の発見・解決について

中堅教師においては「見つけたトラブルや問題点を子どもたちに返し、気づかせるようにしている」教師の平均値が3.3と最も高い値を示している。熟練教師においても同様で、平均値3.1が得られた(表8)。

表8 発見・解決の比較

問題の発見・解決	中堅教師	熟練教師
子どもに気づかせる	3.3	3.1

エ 子どもと保護者との関わりについて

中堅教師においては「問題を抱えた子どもへは家庭訪問等を

行い、保護者との連絡を密にしている」教師の平均値が3.5と最も高い値を示している。熟練教師においても同様で、平均値3.5が得られた(表9)。

表9 子どもと保護者との関わり比較

子どもと保護者との関わり	中堅教師	熟練教師
保護者への密な連絡	3.5	3.5

オ 教師集団について

中堅教師は「問題点を見つけたり指導上の悩みを抱いたりしたときは同僚や先輩の教師に相談している」の平均値が3.3と最も高い値を示している。一方、熟練教師は「他のクラス子どもであっても担任に連絡したりその場で指導したりしている」の平均値が3.5と最も高い値を示した(表10)。

表10 教師集団の比較

教師集団	中堅教師	熟練教師
同僚や先輩に相談	3.3	3.0
共同的指導の意識	3.2	3.5

4-3-3 考察

上記ア～オの5つの指導内容や手立てについて、中堅教師と熟練教師との間に差異が見られたのは、「教師集団について」である。

中堅教師は、同僚や先輩の教師に相談することをより重視しているが、熟練教師は、気になる子どもがいた場合、学級担任に知らせたりその場で指導したりすることをより重視していることがわかった。

気になる子どもを見かけたら、状況を担任に知らせたり、その場で指導したりすることを学校内の全教職員で行っていくことが「いじめ問題」に対処していくための重要な視点であると言することができる。

5 まとめ

本研究によって、次のことを明確にすることができた。

- ◇ 多くの教師はいじめがあると考えており、それに対処する

ための手立てを講じている。

- ◇ 中堅教師は、熟練教師の指導内容や手立てについて高い興味・関心を抱いている。
- ◇ 中堅教師と熟練教師の手立てはほぼ同じであるが、熟練教師は指導力をより発揮している。

6 今後の研究の方向

若手教師や中堅教師が熟練教師に聞いてみたいと思っていることは、次のようなものが挙げられる。

- ・子ども同士の高め合いができるクラスにするために大切にしていることや工夫、手立て。
- ・学級会（話し合い）で自由に活発な話し合いができる場にするための手立て。
- ・学級成員みんなで学習していくんだという雰囲気づくりのための手立て。
- ・学習意欲の継続・向上させるための有効な手立て。
- ・あたたかい雰囲気のクラスづくりのために手立て。
- ・問題行動を起こしがちな子どもとの信頼関係づくりのコツや体験談。
- ・子どもとの信頼関係をつくるために日常的に心がけていること。
- ・スモールステップで問題解決させるための基本的な手立て。
- ・問題を抱えている子どもの保護者との関係づくりや連絡のとり方のポイント。
- ・職場の同僚や管理職との関わり方についてのポイント。

そこで、今後は熟練教師を交え、若手教師や中堅教師と意見交換する機会を金沢地区、能登地区、加賀地区で設定し、「いじめ問題」について継続的な研修会を開催していきたいと考えている。

これによって、「いじめ問題」に対処するための手立てを一般化していくことができ、学校現場の教育活動に資することができると思える。

参考文献

1. 「教育の情報化に関する校内研修と教員のICT活用指導力の実態把握」, 宮崎清, 高橋純, 堀田龍也, 2007, 第23回日本教育工学会全国大会講演集
2. 「教員の職能開発と情報化に対応した教育の実践力」, 松田稔樹, 2007, 第23回日本教育工学会全国大会講演集
3. 「教師が磨き合う学校研究・授業力量の向上をめざして」, 木原俊行, 2006, ぎょうせい
4. 「いじめを許さない学校づくりをーいじめ対応マニュアル作成事例集ー」, 石川県教育委員会, 2006
5. 「いじめ防止プログラムー一人ひとりの教師への指針ー」, 尾木直樹, 1997, 学陽書房
6. 「いじめーその発見と新しい克服法ー」, 尾木直樹, 1995, 学陽書房
7. 「文化としてのいじめ問題ー対策でいじめはなくなるー」, 藤井護郎, 1997, 社団法人農山漁村文化協会
8. 「いじめ問題ー日本独特の背景とその対策ー」, 稲村 博, 1986, 教育出版
9. 「育てるカウンセリングによる教室課題対応全書・いじめ」, 國分康孝・國分久子, 2003, 図書文化社
10. 「いじめ問題の発生・展開と今後の課題」, 今津孝次郎, 2005, 黎明書房